

カリキュラム・教科書・アセスメントコンポーネント

ニュースレター（第18回）

各教科 CDT、SWC との熱心な協議続く！

現在、すべての教科において教科書の内容開発は完了し、編集作業（第1ドラフトの確認）段階に入っています。12月に入ってから、連日、各教科 CDT と教科別カリキュラム委員会(SWC)との協議がもたれ、ドラフト内容についての検討が熱心に行われています。

これまでも教科別の SWC 会議が行われてきましたが、残念ながら、JICA 専門家の参加は認められていなかったため、議論はもっぱらミャンマー側のみで行われてきました。したがって、JICA 専門家は会議の後、CDT から個別に協議内容を聞くしかなかったのですが、協議ではかなり強圧的な意見や指示が SWC メンバーから出され、なかにはその指示が CREATE で採ってきた基本的な方針と矛盾するものも含まれ、会議の後の CDT の表情は常に曇りがちでした。この大きな原因の一つとして、SWC メンバーが新しいカリキュラム・フレームワーク (CF) についてほとんど理解していないということがあったように思います。CF の理解なしに、共通の土台に立った議論はできません。

そこで、CREATE では教育省に対して、JICA 専門家の参加も認めるよう要請を出し、この度ようやくそれが実現しました。今月になって連日行われている SWC 会議には、JICA 専門家及び CREATE 雇用のカリキュラム・オフィサーも参加しています。JICA 専門家が会議に参加していることもあってか、これまでに聞いていたような強圧的な意見や指示はこれまでのところほとんどありません。また、JICA 専門家からは、CF に記された基本方針、教科書内容開発の基本的な考え方やアプローチなどを理論的に、かつ論理立てて説明いただいているために、大方の SWC メンバーからも大きな賛同をいただいているようです。

これから来年3月頃までは、引き続き、SWC 会議が開催される予定ですが、参加者の皆さんが同じ土俵の上に立って建設的な議論を進めていただけることを期待しています。



英語教科書、国内開発で進めることで決定！

ちょうど1年ほど前、突然、「新しい英語の教科書は外国の出版社のものを使いたい」という提案が教育省から出されました。この意見は現教育大臣アドバイザーの Than Oo (タンウー) 氏から出てきたもので、ミャンマー国内には質の高い英語教科書を開発する人材が十分ではないため、外国のものを使ってはどうかという提案のもと、これについて調査を進めているということでした。教育省の指示の下で同省アドバイザーの Win Aung (ウィンアウン) 氏がケンブリッジ社、マックレーン社など4社について調査を行ったとのことでした。

しばらくの間、この話は全く聞かれなくなっていたのですが、先月末頃からこの議論が再燃してきました。そこで、12月14日（月）教育省ミャンマー教育研究局 (DMER) において、この議論に対する最終決定を下す会議が開催されました。同会議には、上記のタンウー氏、ウィンアウン氏、ミンテイン氏（教育省アドバイザー）はじめ、カインミェ氏 (DMER の局長)、ゾウミン氏 (ミャンマー語及び少数民族言語局の局長)、ティーハ氏 (元英語教育学教授)、英語 SWC のメンバーら総勢 40 名の参



加があり、約3時間にわたって真剣な協議が行われました。

協議の結果、最後はDMER局長のカインミェ氏が取り纏めを行い、英語教科書は国内で開発していくことに決定されました。ただ、現在の教育省英語カリキュラム開発人材の能力が十分でないことから、SWCメンバーはもちろんのこと、ブリティッシュ・カウンシルからもテクニカルな協力が欲しいという要望を含める形で会議は終わりました。

第2回教師教育カリキュラムについての検討会、開催される！

これまでCREATEの教師教育コンポーネントでは、新しい基礎教育カリキュラム・フレームワーク（CF）に基づいた新しい教師教育のためのカリキュラム・フレームの開発を行ってきました。そこで、12月18日（金）、CREATEプロジェクト事務所の会議室において、このカリキュラム・フレームについての検討会が開かれました。

本会議には、教育省教師教育研修局（DTET）のスタッフをはじめ、教員養成校の講師、教育省アドバイザーなど多くの方が参加され、教師教育カリキュラム・フレームについての積極的に意見を交換されていました。



コラム：12月6日はミャンマーの「国民の日」でした。一体、どのような日なのでしょう？

今月6日（日）はミャンマーでは「国民の日（National Day）」という祝日でした。日本のように「振替休日」の制度がありませんので、日曜日と重なったことによって、私たち日本人の中で、この日がミャンマーの祝日であったことに気付いた人はそれほど多くないかもしれません。

この「国民の日」とは、ミャンマーにとってどのような日なのでしょう。実は、**1920年12月5日に起こったラングーン大学（現ヤンゴン大学）学生らによる初めての英植民地主義に対するストライキ**と深い関係があります。1920年以前にはミャンマーには総合大学（University）は存在せず、高等教育機関はラングーン・カレッジとユタダン・カレッジの二つでした。ただ、国内で総合大学設置の要望が高まっていたこともあって、イギリス植民地政府は、大学法を公布し、二つのカレッジを総合大学に格上げしました。しかし、格上げされた総合大学は、オックスフォード大学やケンブリッジ大学を模したもので、全寮制、選ばれた少数の学生を対象、カリキュラムも英国植民地政府の下で従順に働く官吏の養成を目的にしており、ミャンマーの一般人を対象としたものではありませんでした。したがって、ミャンマー人の入学は極めて狭き門となっていました。これに対して、多くの市民や学生らが立ち上がり、英植民地下での大学令に反対したのです。この反対運動は次第に対植民地主義運動にまで拡大し、全国に広がっていきました。ミャンマー政府は、これはミャンマー人の「民族的誇り」の表れであるとして「国民の日」としたのです。

ここで、「あれ？」と思われる方もおられるでしょう。上記ストライキが起こったのは1920年12月5日で、12月6日ではありません。では、なぜ12月6日が「国民の日」だったのかという疑問です。実は、このストライキは、「**タザウンモン月（新暦の11月）の満月の日から10日後**」に起こったとされており、満月の日が毎年変わるため、その10日後の「国民の日」も毎年変わると言う訳です。ちなみに、来年の「国民の日」は11月24日になるようです。

文責：田中義隆（カリキュラム・チームリーダー）
編集：宮原光（プロジェクト・コーディネーター）